

# 文芸

## 俳句

山吹の垣根めぐらし人住まず  
池田 逸子

夕暮の水の明るき植田かな  
伊藤 敬子

恩師消え終い支度や翡翠鳥  
今関満喜子

記念樹の初生り梅を数えけり  
魚地 照子

新しき街どの道も花水木  
江森 悦子

一服づつ講釈のつく新茶かな  
大谷 武彦

次の世へ吹かれて流る花筏  
川島 孝夫

母の日や妣ははに一つの嘘悔はげいる  
川島 通則

春風や清き一票車椅子  
向後 寛

母の日の故郷遠くなりけり  
越川せつ子

被災者の流す涙や春の虹  
小松 藤男

青空の光あつめて畦と塗る  
佐瀬 輝夫

気丈にて生きたる母は手八丁  
鈴木とし子

母の日や何も変わらず過ぎて行き  
鈴木 利子

池にかわらず空にはひばり一斉に  
玉虫 栗扇

母の日や園児のしぐさ母に似て  
土屋美枝子

母の日は今も眩しき言葉なり  
土屋 義昭

馴染みたる実行よりの苗木植う  
戸村 静草

被災者の笑顔が救い春来たる  
早川 勇

## 短歌

つむじ風に散りし桜の花びらが  
抱かれ回され空を飛びゆく  
八角 三枝

三重の塔に立らたる傍らに  
花枝と伸ばし桜咲きぬつ  
西山満里子

亡き友の形見の上つ張り今日は着て  
ブランド・ゴルフの試合に臨む  
吉岡 信子

娘むすめの夫の烟隅を借り妹は  
葉物作ると気負ひぬるなり  
青木 秀子

風に散る木の葉の音を聴きてぬつ  
夫逝き早も半年経たり  
芹川 初子

鶉ひよどりは刺し置く林檎を食べ残し  
姿見せざり涙りゆきしか  
押尾 輝子

大地震の影響なるか音楽会  
今年中止と葉書届きぬ  
田崎 尚美

庭隅にわがしの小さき花壇に芽生へたる  
百合の育らと今朝も見に来ぬ  
鈴木まさ子

うぐいすの初音ききつつ散歩する  
春もいつしか深まりぬたり  
平山 芳子

花散りて葉枝となりし葉の間に  
色濃き夢の残りぬるなり  
島田ますみ

八百年生きし椎の木洞穴に  
氏神様の祀られぬたり  
齊藤つね子

母の日にレースのつきしエプロンと  
子より贈られ心華やぐ  
高梨 キヨ

原発という科字の進歩に頼り過ぎ  
事故の処理には不手際なりし  
伊藤 定男

ふるさとに空がこんなに広いんだ  
帰省の孫がふうつと呟く  
越川 義則

出荷止めの野菜と出せし農家有り  
答むるは酷か愛育の目曰  
越川 福子

世界中TVで出来る散歩には  
現代文明の素晴らしさを知る  
鈴木 益郎

旅ひとつせずに子のため野菜着て  
これが生きがいと母の生涯  
土屋 好



## 縄文と弥生、 融合した土器

平成十三年から十七年にかけて、長倉宮ノ前遺跡が銚子連絡道路建設に伴って発掘調査されました。その時、縄文とも弥生ともつかない土器が、数多く出土しました。土器の形は縄文の鉢や弥生の壺があり、文様は縄文の縄目文様や弥生の沈線文様などが混在し、どちらともつかないものもありました。その中でここに紹介する写真の土器は、形は袋のような壺で、高さはほんの7センチほどの、小さな器で、口の部分は欠けています。文様は器の膨らんだ部分に、へらで線描きした海藻のようなモチーフの中に、縄目が付けられた簡単なものです。このよう



な小さな土器が、何に使われたか詳しいことは分かりません。この壺、文様は縄文時代の伝統を残しているものの、形は弥生時代のもので、この土器ひとつとっても、縄文時代から弥生時代に橋渡しするものと言えるでしょう。

このように縄文時代から弥生時代に移り変わる土器は、利根川下流域からこの栗山川流域で、点々と見つかっています。この近くでは、多古町志摩の埴台遺跡で、多量の土器が出ています。埴台遺跡では集落跡やお墓が発見され、特にお墓では骨壺に使われた土器が多く出土しました。また、姥山貝塚では縄文時代最後の土器が出土しています。このことからこの地域は縄文人の伝統的な生活が続いていたところに、西からやってきた弥生人などが、平和裏に融合したからと考えられます。異なる文化の衝突ではなく、融合合う心を持つ日本人はこの頃からの特質かもしれません。